

2024. 10, 27 (日) 使徒20:1~6

20:1 騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ、マケドニアに向けて出発した。

20:2 そして、その地方を通り、多くのことばをもって弟子たちを励まし、ギリシアに来て、

20:3 そこで三か月を過ごした。そして、シリアに向けて船出しようとしていたときに、パウロに対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニアを通過することにした。

20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリストタルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。

20:5 この人たちは先に行き、トロアスで私たちを待っていた。

20:6 私たちは、種なしパンの祭りの後にピリピから船出した。五日のうちに、トロアスにいる彼らのところに行き、そこで七日間滞在した。

<説教>

〈騒ぎが収まると〉(20:1)の〈騒ぎ〉とパウロが第3回伝道旅行をしている途中、エペソで起きた〈大変な騒ぎ〉(19:23)のことです。アルテミス神殿の銀細工人デメテリオたちが、パウロの教える福音に反対して声を上げたので〈町中が大混乱に陥り〉(同 29)、集まった会衆は〈混乱状態〉(同 32)になりました。〈町の書記官が群衆を静めて言った〉(同 35)ことでようやくその騒ぎが収まったのでした(同 35-40)。

それでパウロは〈御霊に示され〉(19:21)て決めた通りに、エペソから〈マケドニアに向けて出発〉(20:1)することにして、〈弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ〉ました。〈弟子たち〉とはパウロから教えを受けた弟子たちということかもしれませんが、それと同時に、いやそれ以上に主イエス・キリストの弟子たちと言ってもいいでしょう。パウロがエペソを去っても、エペソが偶像アルテミスを礼拝する町、デメテリオたち銀細工人たちの商売で繁盛する町であり、エペソの教会が今後も直面する問題、困難は残ったままです。そんな〈弟子たち〉には確かに〈励まし〉が必要でした。その内容は、本日の箇所には書かれていません。パウロは後にミレトスでエペソの教会の長老たちを呼び寄せて語ることとなります(17-35)が、おそらくそれとかなり重なる内容だったと思われます。

ここで言う「励ます」とはただ「頑張れ」と言うものではなかったはずで、それは何よりも神のみことばと聖霊による励ましでした。主イエスは聖霊を「助け主」(パラクレートス)と言われました(ヨハネ 14:16,26。15:26)が、「励ます」(パラカレオー)という言葉はそれとよく似ています。主イエスの弟子たちの励ましは何よりも神のみことば(聖書)と、みことばと共に働きになる聖霊から来ます。主イエスがご自身の弟子たちと世の終わりまでいつもともにいてくださる(マタイ 28:20)のは、みことばと聖霊によります。それが主イエスの弟子たち、私たちの慰め、助けです。だから、私たちが誰かを励まし助けると言うのなら、それもまた私たちが受けているみことばと聖霊によってです。聖霊の示しを受けてエペソを去ることを決めたパウロでしたから、エペソの弟子たちの〈励まし〉にあたってみことばと聖霊によったことは間違いありません。

さてパウロは〈その地方を通り、多くのことばをもって弟子たち励まし、ギリシアに来〉(2)ました。〈ギリシア〉とはここではアカイア、もっと言えばコリントのことです。こうしてパウロは再びアジアからヨーロッパにやってきました。このエペソ出発からマケドニアを通過してギリシアに着くまで1年ほどの月日がかけたと考えられています。その間もパウロは〈多くのことばをもって弟子たちを励まし〉ました。〈多くのことばをもって〉とは「多くのみことばの説教によって」ということです。そしてこのときの〈励まし〉ももちろん、1節で見た〈励まし〉と同じだったに違いありません。マケドニアには第2回伝道旅行のときに既に訪れ、みことばを宣べ伝え、主イエス・キリストを信じる弟子たちが起こされ、キリスト教会が生まれたピリピ、テサロニケ、ベレアの町々がありました。

このときおそらくピリピで、「コリント人への手紙第二」をパウロは書きました。その中でパウロは言っています。「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。私は証しします。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。そして、私たちの期待以上に、神のみこころにしたがって、まず自分自身を主に献げ、私たちにも委ねてくれました」(Ⅱコリント 8:1-5)。パウロが語った〈多くのことば〉による〈励まし〉の中にはこのような〈聖徒たち〉(具体的にはエルサレムの教会)への献金の勧めもあったに違いありません。

さてコリントに来たパウロは〈そこで三ヶ月を過ごし〉ました(3)。この間に「ローマ人への手紙」を書きました。その中ではこう言います。「しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです」(ローマ 15:25-26)。パウロはコリントの教会でもこのようなエルサレム教会への献金の勧め、励ましもしたのでしょうか。そのエルサレムに行くために〈シリアに向けて船出しようとしていたときに、パウロに対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニアを通過して帰ることにし〉(3)ました。

そんなパウロの「同行者たち」が4節に記されています。彼らは「同労者」でもありました。〈ベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリストアルコとセクンド〉はマケドニアの、〈デルベ人のガイオ〉とデルベのすぐ近くのリステラ出身の〈テモテ〉はガラテヤの、〈アジア人のティキコとトロフィモ〉はエペソの各教会を代表して献金をパウロと共にエルサレムの教会に持って行こうとしていました。これらの教会はパウロ一人の働き、奮闘によって始まり、神を礼拝し、神と人に仕えて来たものではありません。そこには必ず「同行者」「同労者」がいました。パウロが語る主のことばを聞き、聖霊の力によって信じ、悔い改め、立ち上がり、〈この道〉を歩んで行く。そうやってパウロの「同行者」となり、またパウロの代わりにパウロとは別の町に行って福音を宣べ伝えてパウロの「同労者」となった、そんな人々がいました。殊に異邦人の中からそんな人々が起こされる。パウロにとってどれほど励ましとなったのでしょうか。

先にエペソでパウロが弟子たちを呼び集めて励ましたことを見ました(1)。また、マケドニアでも多くのことばをもって弟子たちを励ましたことも見ました(2)。そしてコリン

トでも(3)。パウロの励ましを受けた弟子たちが励まされ、パウロの勧めに従ったとすれば、それはパウロにとっても大きな励ましになったことでしょう。実際、各地の教会がエルサレムの教会への献金を喜んで献げたのです。

そして、〈パウロに対するユダヤ人の陰謀〉(3)などがなおも明らかになり、自分たちも「巻き添え」を食うかもしれない危険をも顧みずに、エルサレムまでの長い道のをパウロと共に行くことを決めた「同行者」たちがいました。彼らはパウロの同労者であり、悪魔との霊的戦いを共に戦ういわば「戦友」でもありました。彼らもまたみことばと聖霊の導きに従ったのです。主イエスがみことばと聖霊によって共にいてくださる、共に戦ってくださる、そして自分たちをイエスの勝利に最終的に与らせてくださると信じたのです。

このような「励まし、励まされる同行者」がいたからこそ、アジア、ヨーロッパに主イエスのみことばが力強く広まったのです。私たちも、まず一人一人が救い主イエス・キリストを信じ、主がみことばと聖霊によって共にいてくださることを信じ、更にお互いをそういう者として励まし合い、主の道を共に歩み、主の戦いを共に戦い、主の勝利に与る者とさせていたいただきたいと願い祈ります。